

『めぞん一刻』の物語時空の構造

—閉じられぬ円環の住人たち—

土 屋 武 久

はじめに：異界に聳ゆる一刻館

本稿で試みるのは、1980年から87年まで青年コミック誌『ビッグコミック・スピリッツ』（小学館）に連載された『めぞん一刻』の特異な物語時空の解説である。

まずはコミック史における同作品の位置づけを押さえておこう。かつて日本のマンガには、〈貧乏下宿もの〉とでも呼ぶべき一群の作品があった。老朽化したアパートに住む貧しい若者が、アパート内外の人びとと交流するなかで起きるさまざまな出来事に、ときに心躍らせ、ときに打ちのめされながら、だらだらと人生の一時期を過ごしていく、というのが基本的なストーリーラインである。作品タイトルとしては、松本零士『男おいどん』（1971-73）、福本たかし『独身アパートどくだみ荘』（1979-93）などがあがるだろう。作風はだいぶ異なるが、主人公が奇橋な隣人たちに翻弄されまくる（その点では『めぞん一刻』にかなり近似する）、鴨川つばめ『マカロニほうれん荘』（1977-79）を加えてもよいかもしれない。これらはほぼ例外なく、経済的に恵まれず不器用で将来性もない、いわば負け組の若者が主人公であり、なにをやってもうまくいかないその姿が、読者の笑いと共感を誘いヒット作となった。

『めぞん一刻』も、〈貧乏下宿もの〉の系譜に正しく連なる作品である。大正時代に建てられたと覚しきおんぼろアパート「一刻館」。変人ぞろいの住人たち。主人公・五代裕作の貧しい境遇、実直でお人好しだが極度に世渡り下手なところなどは、このジャンルの特徴を十二分に踏まえている。

しかし、比較的后発の作品であった『めぞん一刻』は、それまでの「貧乏下宿

もの」とは、明確に一線を画す。他の作品群の下宿、アパートがどこまでも現実界に置かれるのに対し、一刻館が〈異界〉として屹立する点においてである。そして一刻館の住人たちは、異界に住まう〈異人〉として描かれる。この〈一刻館＝異界説〉を最初に唱えたのは、民俗学の造詣も深い評論家の大塚英志であった。

大塚の考察を検証するにあたり、まずは一刻館の立地を考えてみよう。この古色蒼然たるアパートの所在地は、東京都練馬区の架空の地、「時計坂町」とされる。一刻館に備えられた電気仕掛けのものものしい時計台に、その地名は由来する。往時には時を告げる鐘の音が、町中に響き渡ったという。この地名が暗示するのは、本作品が時間の流れにかかわる物語であることだが、これについては後述する。次節ではまず、一刻館に行きつくために（あるいはそこを後にするために）誰もが通らねばならないこの坂の正体を少しく考察しよう。

I. 坂＝境界 / 結節点、あるいは物語生起の場

緩いカーブを描いた、しかし相当にきつい勾配の時計坂を上り切ったあたりに、一刻館は建つ。坂の片側は丘陵状の斜面、反対側は切り立った崖となる。開発は当然、坂の下から進み、順次坂の上へと進んだはずである。こうした経緯で坂の上と下では、おのずと異なる空気が醸成されていく。

「坂」の語源は諸説あるが、「境（さかい）」とする説が有力であり、これにしたがうなら、古事記の黄泉比良坂^{よもつひらさか}の例を引くまでもなく、坂はふたつの世界の境界を暗喩することになる。すなわち、時計坂は現実界と異界の境界にあって、ふたつの世界を分ける。と同時に、この坂は双方に通じる回路でもある。作中ではこの時計坂を、登場人物たちが上り下りするコマが、モチーフとしていく度となく繰り返される。もちろんこれは、彼らが異界とこちらの世界を往き来することの暗喩であろう。

現実界と異界をつなぐ領域であるから、時計坂では物語を動かすさまざまな事件が起きる。たとえば、第35話「ふりむいた惣一郎」を取り上げてみよう。このエピソードでは、散歩の途中で行方不明になった響子の飼い犬の惣一郎（この犬の名は、彼女の亡き夫の名にちなんでつけられたもの）を探し出すエピソード

である。八方手をつくして探しても響子は惣一郎を見つけ出せず、沈んだ面持ちで時計坂をとぼとぼ上る。坂の中腹でふと顔を上げると、そこに夕日を浴びた五代と惣一郎のシルエットが浮かび上がる。五代も響子のために、町中を探し回ってようやく惣一郎を発見・保護し、一刻館に連れ帰るところだったのだ。このとき、響子は五代の後ろ姿に亡夫の幻影を見る。大きく目を見張り、思わず「惣一郎さん!」と声をかけるが、すぐにそれが亡夫でないことに気づく。

このシークエンスは、坂を上る方向、すなわち一刻館に向かう方向で進行する。アニメ版では、夕暮れを背景に道端のコスモスが一陣の風に揺れ、坂の下方から上方へ順に街灯が点いていく演出がなされているが、これはもちろん響子の心の動きと高ぶりを暗示する。それ以前にも五代が自分に寄せる好意に気づいていた響子であったが、この瞬間に彼女は自分が愛した亡夫の面影を五代に認め、はっきりと彼を意識するようになる。「あ〜、びっくりした。全然似てないのに」と戸惑いながら。坂の途中で起きたこの小さな出来事を胸に秘めつつ、響子と五代は一刻館へと帰っていく。すべては一刻館へと回収されるのである。

もうひとつ、こんどは坂の上から下に向かう逆方向の例をみてみよう。第43話そのタイトルも示唆的な「坂の途中」では、些細な行き違いから響子が三鷹（五代にとっては恋のライバル）と再婚すると勘違いした五代が、傷心をかかえて一刻館から行方をくらます。自責の念にかられた響子は五代を探し回り、憔悴しきって一刻館へ戻ろうとする。そこに、こっそり一刻館のようすをうかがいに来た五代と鉢合わせし、必死で彼を追って時計坂を駆け下る。逃げる男と追う女。これは先述した黄泉比良坂でのイザナギとイザナミの姿を彷彿させる。もっともこの場合、女によこしまな害意は微塵もなく、男は男で女に捕まることをひそかに期待しているのかもしれないが。坂の道端に倒れ込んだ二人は大泣きし、結局揃って一刻館へと帰っていく。

このように『めぞん一刻』を読み進めていくと、異界と現実界を結ぶ時計坂では、いくつもの象徴的な事件が起きていることに気づくだろう。本項の先の例では、響子は坂の下方から、異界に近い位置にこの世の人ではない夫の幻影を目にし（夕刻という時間帯からして、ここに逢魔ヶ時についての示唆を見てとるのは

妥当であろう)、それが彼女のその後の人生をある方向に導いていく。あとの例では、異界からの離脱を試み坂の下方、すなわち現実界に移った五代を、異界側、すなわち坂の上方から響子が回廊に向かう。このように坂は、異界と現実界を截然と分ける境界であると同時に、両者をつなぐ回廊として、物語進行の動力を生じさせる場となることが読み取れる。

Ⅱ. 一刻館の人格

次に、一刻館の住人たちをみてみよう。ここでの鍵語は〈同一性〉である。

世評では、一刻館の住人たちを非常識なほど強烈な個性の持ち主とすることが多い。しかし、これを否定するのは、哲学者・文芸評論家の宇波彰であった。宇波によるなら、彼ら住人たちは「相互に差異を示してはいるが、それぞれが強烈な個性を持っているわけではない」(宇波 89) とされる。たとえば、アパートでは人目も憚らずいつも下着姿で過ごしているスナックのウェイトレス・六本木朱美は、それだけで十分に個性的、もっというなら変人であるが、「それ以上の特性は見えてこない」。作中最も個性的とされる四谷という住人は、年齢・職業不詳、自分の下の名も明かさない、得体の知れない怪人物で、趣味は覗きという問題児ぶりだが、一刻館特有の秩序を脅かすことは絶えてない。それどころか、逆説めくが、彼自身が一刻館の異界性の主要な部分を構成し、その安定性に貢献しているようにみえる。たとえば四谷の趣味の覗きという行為も、それ自体はむろん迷惑ではあるが、部屋と部屋の境界が不分明な一刻館にあっては彼なりのコミュニケーションのとり方と解釈できるし(実際、四谷は隣室の壁に穴をあけ、部屋間を往来する)、それが一刻館の日常として住人たちに受け容れられているのである。主人公・五代も、妄想癖が強いことを除けば、優柔不断で心優しい、つまりはどこにでもいる平凡な若者に過ぎない。以上から宇波は一刻館のありようを次のように総括する。

一刻館の安定した秩序を根底からくつがえしてしまうようなできごとや人物は存在しない。一刻館は一種の共同体として描かれているが、この共同体か

『めぞん一刻』の物語時空の構造—閉じられぬ円環の住人たち— 土屋 武久

ら排除しなければならないような異質の要素はまったく存在しない。そのために、一刻館の世界は不安がなく、平和で、変化に欠けている（宇波 89）。

これは、現実の共同住宅内ではおよそあり得ない人間関係（宇波の言葉を借りれば「個体の相互関係」）ではないか。現実の世界では、アパートやマンションの人間関係は、反目、悪意、敵視がそちこちに潜むか、それ以前に関係の希薄さ、無関心と無干渉に支配される場合が多いことをわれわれは知っている。ところが、NHKの連続テレビ小説のごとく、一刻館には悪者がひとりも存在せず（徹底した悪意の不在）、夜ごと開かれる宴会に象徴されるように和気あいあいとした空気に満たされている。一刻館の住人たちは、みな同類で仲よしのだ。¹

これに対し、異界である一刻館に住む者たちがやはり只者でないと考えたのは、前出の大塚英志であった。大塚は民俗学者・飯島吉晴の〈竈神と廁神〉をめぐる論考を引きながら、一刻館内の人間関係を考察する。それによると、比較的まともな人物（いいかえれば、ただの〈人間〉）とされる五代をのぞけば、一刻館の住人たちは揃いも揃って〈異人〉であり、さらにいえば〈一刻館〉という〈家〉に棲みつく〈家の神〉とされる。大塚は、彼らを土着の神〈座敷童子〉に類するものとする。座敷童子はいずこからともなく現われてどこかの家に住みつき、他愛もない悪戯を繰り返す。その家に留まるかぎり座敷童子は居住者に恩恵をもたらす家は栄えるが、立ち去ると家運は急速に傾いていく。愛すべき存在でありながら、同時に畏怖すべき家の神でもある。一刻館での五代と他の住人たちとの関係を、大塚は次のように説明する。

五代は〈一刻館〉の家の神になつかれてしまっているのである。彼らが〈宴会〉好きなのも当然であろう。神々が現われるのは宴＝マツリの空間なのだから。（中略）また五代が彼らにしばしば酒や食料品をたかられるのも、神は本来“供物”を要求するものと相場が決まっているのだから仕方ない（大塚 123 [傍点原文]）。

実際、五代も住人たちと自分との関係性を、「あんな妖怪みたいな連中でも、いないとさびしいもんだな」と述べている（第46話「願ひ事かなふ」）。宇波のように住人たちを排他的・閉鎖的な没個性集団とみるにせよ、大塚のように妖怪（零落した神々）とみるにせよ、彼らが表面上の微細な差異を除けば一様に同質の存在であることに変わりはない。それは、一刻館という共同体が、同一性という原理に支配されているからにほかならない。この同一性によって担保され、外部から切り離された心地よい空間のなかで、彼らは陸み合い、存分に憩う。

仮に大塚の見解にしたがって、住人たちを異人ないし〈家の神〉とみるならば、これらの神々の祠祭者ないし〈巫女〉は当然〈管理人〉の響子である。古来、〈家の神〉の祠祭はその家の主婦が担当するのが普通であり、響子という〈巫女〉は〈家の神〉に使え、神々とただの〈人間＝五代〉との関係を取り持つ。かくして三者の基点に支えられた、異界としての一刻館の秩序は形成されるのである。

Ⅲ. 磁場としての〈異界〉、その拘束力

つとに指摘されるように、「一刻館」なる建物名からは、「束の間の住みか」というコノテーションが読み取れる。それは、「青春」にも「人生」にも解釈されるものであろう。一刻館は本来ならば、青年期にある者たちの仮の宿であり、そこから大人の階梯へと進むための時間・空間であったはずだ。実際、住人たちは、きわめて影の薄い一瀬氏をのぞけば、いずれも若く、ほとんどが独身者であり、〈家庭〉というありようから切り離された存在である。そのため、然るべき時期が訪れたなら、ひとはそこから立ち退くことを求められる。それゆえ大塚は、『めぞん一刻』がまだ完結していない時期に、結末を次のように予想した。

ぼくはこの物語のラストシーンは五代くんと響子さんが一刻館を出て行く場面になるだろうと予想した。一刻館が子どもと大人の境界にある空間だとすれば、当然、大人になった彼らは（あるいは大人になるために）一刻館を去らねばならないと考えたわけだ。しかし結果は御存知のように五代くんらは結婚し子どもができて尚、一刻館にとどまり続けたのである。（大塚 [1988] 198）

『めぞん一刻』の物語時空の構造一閉じられぬ円環の住人たち― 土屋 武久

大塚が奇異に感じたように、主人公の五代と響子は結婚子どもをもうけながら、なぜ一刻館に留まり続けたのか。答えは一刻館という異界がもつ強い磁力に求められるだろう。

異界はその住人たちを慰撫し、外部より押し寄せる脅威から保護する。それと同時に、その見返りとして、彼らを異界内に留めおこうとする。いいかえれば、ひとたび異界に入り込んだ者が勝手にそこから抜け出すことを許さないのである。

比較のために、本稿の冒頭であげた貧乏下宿もののもうひとつの傑作、松本零士『男おいどん』を取り上げてみよう。この作品の最終話は、「無芸大食人畜無害」を標榜し、佻しくも穏やかな日常に憩っていた主人公・大山昇太が、突然奇声をあげながら、長きにわたって住み続けた「下宿館」の階段を駆け下りて外に飛び出し、そのまま二度と戻ってこない、という印象的な結末で終わる。つまり彼には、苛烈な現実に飛び込むことを自ら決意し、それと引き換えに異界から抜け出す自由が残されていたのである。あるいは、下宿館の四畳半の部屋は、人生の一通過点に過ぎないことを、彼自身が自覚していたのかもしれない。

これに比べ、『めぞん一刻』なる異界の束縛は格段に強い。第1話の冒頭で、浪人時代の主人公・五代裕作は、住人たちの干渉に耐えかねて一刻館を退去しようとする。と、そこに美貌の若き未亡人・音無響子が新しい管理人としてやってきて、五代は彼女に一目惚れし、即座に退去を思いとどまる。中盤でも、響子の誤解と嫉妬に思い悩んだ五代が一刻館から引越すのだが、ほどなく響子によって引き戻される。最終話では、上述のとおり、五代も響子も誕生したばかりの娘・春香とともに一刻館に住み続けることを決意する。五代にとって一刻館を去るきっかけはいくどもあったはずなのだが、結局はそこに立ち戻る。一刻館という異界は、そこに足を踏み入れた者を、やすやすとは解放しないのである。

この異界を主宰するのは、前述したように〈管理人〉ないし〈巫女〉の音無響子である。彼女は住人たちの世話役をつとめるだけでなく、彼らに秩序を遵守することを要求する。たとえばあるエピソード（第148話「やましい関係」）では、管理人の仕事を免じられそうになった響子が、「住人があっさり受けいれるはず

ないわ。あたしでなきゃつとまらないんだから…」との自負心をあらわにする。

たしかに一刻館においても、ときに個体によるさざ波のような差異化への衝動が生じることもある。たとえばそれは、先にふれた五代の一刻館からの出奔であったり、響子の両親による響子への再婚への働きかけであったりする。だが、それらは響子によってことごとく粉碎される。こうしたことから前出の宇波彰は、一見たおや女に見える響子こそが、一刻館の住人たちに〈同一化の原理〉を押しつける張本人だと見立てた。「差異化への動きが明確になろうとするたびごとに、K（引用者註：響子）はそれを破壊する。いわば、Kが同一性の反復、差異化への廃棄の原動力として存在する」（宇波 90）。

この同一性の力がさらに嵩じていくと、比較文学者・漫画評論家の四方田犬彦が指摘するように、ついには登場人物たちの顔貌までが酷似していく。

奇妙なことに、永遠に擦ったげな擦れ違いを演ずるこのカップル（引用者註：五代と響子）は瓜二つの顔をしている。いや、そればかりでない。彼らの恋愛の成就にとって障害物である二人の好敵手もまた酷似した顔の所有者なのだ。すなわち、逆三角形の顔のうえに黒く重たげな髪が被さり、大きな額を隠している。巨大な眼はそれ自体としては少しも珍しくないが、つんと上を向いた鼻、小さく窄まった口へと続いて定型を作っている。耳はかならず前に垂れる一房の髪によって粹取られている（四方田 53）。

四方田はさらに続ける。

『めぞん一刻』では、誰もがまるで鏡の反映を前にしたかのように、ほんのわずかの差異を覗けば自分とそっくりの存在にむかって秋波を送り、ともにいることの悦びをわかちあおうとしている。そして、それを妨害しようとする者までが同じ顔をし、同じ行為をはたそうとするのだ。すなわち本質的に閉鎖された鏡宇宙のなかでの自己照射。登場人物たちは本来的に同質であり、どこまで行こうとも終着点のない浮遊状態のなかで、永遠に未決定なまま留

『めぞん一刻』の物語時空の構造一閉じられぬ円環の住人たち― 土屋 武久

まり続ける（四方田 54）。

実際、五代と響子の顔は、性別の差から生じる特徴を除けば、きわめてよく似ている。また、一刻館に居住していないものの、響子に恋慕し、それがゆえに五代と恋のライバル関係にあるテニスコーチ・三鷹に至っては、五代と見分けるのに困難を覚えるほどである。これはやはり、同一化を迫る一刻館の磁場に、三鷹も囚われていると考えるのが至当であろう。このように一刻館にかかわる人間たちは、顔さえも似通っていく。見方によってはきわめて異様で不気味な光景であり、一刻館が異界にほかならないことを示す証左となっている。

Ⅳ. 静止した時間 = 愉悦の牢獄

〈同一性の原理〉を踏まえるならば、われわれは「一刻館」という古アパートの名称についても再考を促されるだろう。この異界は、人生の一時期を過ごす建物のことではなく、「唯一つの時間だけが刻まれた居館」と解したら、穿ち過ぎであろうか。実際、十時二十五分をさしたまま止まった時計台が暗示するように、一刻館の時間は静止している。住人たちは、この静止した時間のなかで、倦むことなく同じ毎日、同じ暮らしを無限に繰り返すのである。

一刻館の時間は静止している。もちろん、一刻館の外では間断なく時は流れていく。季節はめぐり続け、春には満開の桜が風に吹き流れ、夏には炎天のもと冷たい麦茶と素麺が食膳にならぶ。秋には街路樹が色づき、冬にはクリスマスソングに浮き足だった人びとがプレゼントを買い求めて町を往く。そしてまた新しい年が始まる。だが、それにもかかわらず、一刻館の住人たちは、同じ時間を生き続けるのだ。

作中では、たしかに登場人物たちも年齢を重ねていくことが仄めかされる。たとえば、ヒロイン・音無響子は連載開始時に二十一歳で、完結時には二十八歳と推定される。作中後半では自ら「年増ですわ」とおどけてみせる一幕もある。しかし、その顔や体つきは何年経とうが少しも加齢のしるしをみせない。さらに重要なことに、五代にしても響子にしても、その他の住人たちにしても、人格的な

変化はほとんど観察されないのである。五代と響子が互いに思いを寄せ合い、相手を受け容れ、次第に人間の成長をうかがわせる場面もあるのだが、それはもともと彼らが備えていた資質であって変化ではない。一刻館においては時間は静止しており、住人たちはその凍結した時間のなかで、盧生の夢がごとき時空に微睡んでいるのである。管見によれば、『めぞん一刻』のこうした時間の性質を最初に指摘したのは、先述の四方田犬彦である。少しく引用しよう。

登場人物たちは（中略）どこまで行こうとも終着点のない浮遊状態のなかで、永遠に未決定なまま留まり続ける。五代君と響子さんは接吻もしなければ、性交にも到達しない。「めぞん一刻」はもう数年にわたって「ビッグコミック・スピリッツ」に連載され（引用者註：1986年現在）、当初浪人生であった五代君は今日では大学を卒業した青年である。とはいうものの、根本的なところで時間は少しも進展していない。誰もが大きいなる停滞感覚のなかで、いつまでも同じ遊戯の反復に終止している（四方田 54）。²

この〈静止した時間〉と〈同一性の反復〉の問題について、やはり高橋留美子原作の劇場アニメ映画『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』（1984年）を補助線としながら、もう少し論を進めたい。

『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』（以下『ビューティフル・ドリーマー』）の主題は、『めぞん一刻』と同様、静止した時間である。この作品に不案内な読者のため、手短かにストーリーを紹介しておこう。³

主人公の諸星あたと宇宙人の鬼娘ラムが通う友引高校では連日、学園祭の準備に追われていた。夜半近くまで忙しく立ち働いた生徒たちは、疲れ切って帰宅していき、翌日登校するとまた準備にとりかかる。そうするうちに、彼らは少しずつ奇妙な感覚に襲われる。なんだかきのうとそっくり同じ毎日を送っているのではないのか。それは本当であって、彼らは〈学園祭の前日〉という一日を、何度も繰り返していたのだった。そのことに気づいた者は、ひとり、またひとりとは何処ともなく消えていく。そして、彼らの住む友引町だけが外界から切り離され

『めぞん一刻』の物語時空の構造一閉じられぬ円環の住人たち― 土屋 武久

ていることが明らかになる。実はこの世界は、主人公・ラムが願った夢を、〈夢邪鬼〉という人間の夢を弄ぶ妖怪が実現させたユートピア的世界なのだった。登場人物たちは、究極の選択を迫られる。このまま楽しいことばかりの〈学園祭の前日〉という時間を永遠に繰り返すか。それともこのループする時間から抜け出して、未来へと歩みを進めるか…。

ラムの夢とは何であったか。彼女は語る。「うち、ダーリンが好きなんだもん。ダーリンと、おかあさまや、おとうさまや、テンちゃんや終太郎やメガネさんたちと、ずうっとずうっと楽しく暮らしていきたいっちゃ。それがうちの夢だっちゃ」(0:11:00-0:11:30)。ラムのこの夢を夢邪鬼は叶え、ラムにとって幸福な一日は永遠に繰り返される。ラムは学園祭前日の友引高校を、外部から閉鎖する。彼女にとっては、友引町を除いた世界も自分を取り巻く一部の人間を除いた人びとも一切不要なものとなり、諸星ら一握りの人間たちだけがラムの夢に留め置かれる。そして、この夢の世界の構造に気づいた者は、順に夢の外界へと追放されていく。

妖怪〈夢邪鬼〉は、ラムが夢見た世界の時間の性質を、次のようにドスのきいた関西弁でまくし立て、凄んでみせる。

なまじ客観的な時間やら空間やら考えるさかい、ややこしいことになるんっちゃいまっか？ 帯に短し待つ身に長し、いいますやろ。時間なんちゅうもんは、あんた、人間の自分の意識の産物なんや思たらええのや。世界中に人間が一人もおらんんだら、時計やカレンダーに何の意味があるちゅうねん。過去から未来へキチンと行儀よう流れてる時間なんて、はじめからないのんっちゃいまっか、お客さん？ (0:30:28-0:30:56)

ここで夢邪鬼が仄めかすのは、時間の相対性ないし可塑性である。過去から未来へと一方向の直線になぞらえられることの多い時間だが、それは（少なくとも夢のなかでは）伸縮もすれば、前後が入れ替わりもするし、無限に反復もする。こうして成立したラムの^{ビューティフル・ドリーム}美しき夢は、前述のとおり学園祭の前日という悦楽の時間

が永遠にループする、まさに夢のごとき世界である。⁴

評論家の浅羽通明は『ビューティフル・ドリーマー』を論じた際に、英文学者・土井光知を引きながら、このループする時間の性質を説明する。それを再引用すると、「トマス、アッシーン、浦島の子ら、この種の物語の時間は、暦や時計で計りうる時間ではない。彼らは女神に出逢ってから、女神から離れるまで幻想のうちに生き、過去と未来は現在のうちに含まれ、終りは始めと一つになり、時は直線的に進行せず円周を描いて巡回する」(土井 161)。

ここまでではきわめて正確に、高橋留美子の世界(ルーミック・ワールド)である。しかし、本作は結末でこの世界を崩壊させる。どのようにか。

美しい女神が主宰し楽しいひと時をループし続ける世界は幸福なようで、その実退屈で歪なものかもしれない。何よりそこは、成長や変化が起こりえない。楽しさと引き替えに、人生の足跡、手応えといったものは生じる余地がない、いわば〈愉悦の牢獄〉である。

評論家の吉本隆明の言葉で人口に膾炙したものに、次のようなものがある。「結婚して子どもを生み、そして、子供に背かれ、老いてくたばって死ぬ、そういう生活者をもしも想定できるならば、そういう生活のしかたをして生涯を終える者が、いちばん価値がある存在なんだ」(吉本 201)。だとすれば時間ループに囚われた人間は、仏教用語でいう四苦八苦(ちなみに4989は、五代裕作の大学入試での受験番号であった)に悩まされる凡人に比して、はるかに無価値な存在だということになろう。それゆえその世界から逃れんとする願望が生じるのも自然であろう。土井も指摘するように、「それは不老不死の生活といわれているが、心の成長、生命の展開を阻止された生活であって、長く続くときには退屈で苦痛である(土井 197)。そこで、「人間は必ずこの禁止を破ることになり、魔法は消失し、人間は老翁となるのである」(土井 161)。

どうすればこの倦怠に満ちた時間ループから脱出できるのか。その答えは、上述の吉本の言葉が暗示するような、人生への堅実で真剣なコミットメント、とりわけ恋愛であろう。『ビューティフル・ドリーマー』に何度もちらりと後姿を見せる大きなつば広の帽子とワンピース姿の少女が、ラスト近くであたるに現実世

界への脱出方法を教える。「ここから飛び降りるの。そして、下に着くまでに、目が覚めたらどうしても会いたい人の名前を呼ぶの」。次の瞬間、少女が顔を上げ、初めてその顔を見せるのだが、ここで少女の正体がラムその人であったことが明らかになる。彼女はあたるに、「その代わり責任とってね」と迫る。地上へ落下しながらラムの名を叫んだあたるは、ついに時間ループから逃れ、現実世界へと戻っていく（1：29：10 - 1：30：29）。つまり、自分の夢にあたるを引き込んだのも、そこから彼を解放したのもラムなのだ。自分と結婚し、子どもを育て、ともに人生を送る約束をあたるにさせたことで、ラムの夢は完結し、もはやループする時間も不要となったのである。ここからはふたりは、後戻りも繰り返すこともできない時間を生きていくしかない。かくして静止した時間が、未来に向かって動き出したのである。⁵

以上見たように、『ビューティフル・ドリーマー』と『めぞん一刻』とでは、時間の流れの描き方がまるで異なる。前者では円環のように巡っていた時間がラストで外に向かって動き出したのに対し、後者では時間はいつまでも同じところを巡り続けているのである。『ビューティフル・ドリーマー』では恋愛の成就が時間ループの突破口であったのに対し、『めぞん一刻』では恋愛が成就し子どもまでもうけた五代と響子の夫婦が一刻館に留まり、一刻館の秩序とは本来親和性の低い〈家庭〉を持ち込む。これは、一刻館という異界が次世代へと継承されていくことの暗示にほかならない。

むすびに代えて

一刻館という異界の仕組みとそこに流れる時間の特性を読み解く試みは、ひとまずここで終わる。草稿を筐底に収め、何もないはずの虚空に目を凝らす。ひょっとすると一刻館の住人たちは、今もどこかであの夢のような時間を反復し、ネグティブ・エンディング・ストーリーはてしない物語を紡ぎ続けているのではないか。ひとが『めぞん一刻』の物語に今も惹かれ続ける理由はそこにあるのではないか。青春を遠い過去に置き去りにしてきた私も、うららかな陽光が降りそそぐ昼下がりなどには、一刻館に迷い入り住人たちと無為な時間を過ごすことを、ひそかに夢想するのである。

註

1. 実際、『めぞん一刻』のファンであり、ドラマ版『めぞん一刻』（2007、2008）の脚本を担当した岡田恵和は、NHKの朝ドラ『ちゅらさん』（2001）と『ひよっこ』（2017）に、一刻館を連想させるアパートを登場させている。
2. この点で興味深いのは、四方田による『めぞん一刻』の結末予想である。四方田は、一刻館の静止した時間がついに破れたときに本作が完結すると予想した。

『めぞん一刻』が本質的に完結するとすれば、それは忌避されてきた惣一郎さんの顔が公開される瞬間である。このとき、主人公たちを支えていた自己完結の世界は、予期していなかった顔の出現に直面して、亀裂を生じることになろう。五代君と響子さんは前方へ向かって進むことを止めない時間の流れに加担することで、物語を終わらせることになるだろう。（四方田 54-55）

周知のとおり、大塚のそれと同様に四方田の予想は大きく外れたのではあるが、一刻館に流れる時間の特殊性を鋭く別扱した考察であるといえよう。

3. 『うる星やつら2 ビューティフル・ドリーマー』は、高橋留美子原作とはいいい条、監督・押井守によるオリジナル・ストーリーとなっている。高橋は自作の設定が換骨奪胎されたことに複雑な感情を抱いたようで、「あれは押井さんのもの」と突き放したのは有名な後日談である。とりわけ高橋が嫌ったのは、結末でラムが夢から覚め、止まっていた時間が再び動き出した点であろう。高橋のいわゆる「ルーミックワールド」では、時間は静止しているのが大前提であり、押井はそれを容赦なく退けたのである。
4. 「ビューティフル・ドリーマー」が、「夢見る佳人」ではなく「美しき夢を見る人」の意だと看破したのは、SF作家・平井和正であった。
5. 浅羽通明は、恋愛が時間ループを終わらせる過程を次のように読み解く。

ただ一人の相手を選ぶ。そうすれば相互に拘束が生まれる。それはまた自分だけで浮遊するように生きていた者にとっては、リアルが生じたことに他なりません。さらに二人の明日を否応もなく考えざるをえなくなる。結婚とか子どもとかです。こうして直線の時間が発生し、ループは終わらざるをえなくなるのでした。（浅羽 240）

参考文献リスト

- 浅羽通明『時間ループ物語論 成長しない時代を生きる』（洋泉社、2012年）。
- 飯島吉晴『竈神と廁神 異界と此の世の境』（講談社学術文庫、2007年）。
- 宇波彰「同一性のたえざる反復—『めぞん一刻』論」米沢嘉博編『マンガ批評宣言』（亜紀書房、1987年）、87-96。
- 榎本正樹『野田秀樹と高橋留美子：八〇年代の物語』（彩流社、1992年）。
- 大塚英志『まんがの構造 商品・テキスト・現象』（弓立社、1987年）。

『めぞん一刻』の物語時空の構造—閉じられぬ円環の住人たち— 土屋 武久

——『システムと儀式』（本の雑誌社、1988年）。

河合隼雄『母性社会日本の病理』（中央公論社、1976年）。

四方田犬彦「誰を、どう見分けるか？—漫画におけるキャラクターの根拠」米沢嘉博編『マンガ批評宣言』（亜紀書房、1987年）、39-63。

高橋留美子・平井和正『語り尽せ熱愛時代—ルーミックワールド VS ウルフランド』（徳間書店、1984年）。

土井光知「うた人トマスと浦島の子の伝説」『無意識の世界 創造と批評』（研究社、1966年）。

姫乃たま「ハレとケ 日常で育む恋愛の強さ」『高橋留美子本』（小学館、2019年）、184-189。

平井和正『高橋留美子の優しい世界 「めぞん一刻」考』（徳間書店、1985年）。

めぞん一刻住民会議『一刻館の思いで』（ワニブックス、1993年）。

山田利博「文学としてのマンガ③ 現代マンガにおける異界について」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学 第1号』（1999年）、1-10。

吉本隆明『敗北の構造—吉本隆明講演集』（弓立社、1989年）。